

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

8. 近江における瓦質土器について

奈良 俊 哉

1. はじめに

近江における瓦質土器は、その出土量も少なく、いままで特に振り返られるものではなかった。しかし、最近になって、煮沸形態としての土師質土釜の研究から、瓦質羽釜の存在についても論じられるようになって来た。森隆氏は、「野洲町北桜南遺跡出土の土師器釜について」のなかで、土師器釜の瓦質化について注意をうながし⁽¹⁾、さらに「滋賀県における古代末・中世土器」のなかで、12世紀後半での瓦質羽釜の存在を指摘している⁽²⁾。

しかし、こうした研究は、まだ始まったばかりであり近江において、瓦質土器自体の把握はなされていないと言ってよいであろう。そこで本稿では、先ず瓦質土器という名称、およびその手法等を紹介し、近江において瓦質土器がどのように展開しているのかを見てみたいと考える次第である。

2. 瓦質土器の名称について

瓦質土器という名称を考える前に瓦器研究がどのように行われてきたかを見てみよう。

瓦器についての編年研究を最初に行ったのは、稲垣晋也氏であった。稲垣氏は、法隆寺福園院出土の瓦器碗を型式毎に分類し、瓦器碗の編年を初めて確立した⁽³⁾。しかし、この編年案は白石太一郎氏によって修正案が出された⁽⁴⁾。これ以後基本的な部分においては白石氏の編年案が指示されている。

しかし、瓦器碗研究が進むにつれて、畿内における瓦器碗も紀州・丹波・摂津・山城・河内・大和という地域でそれぞれ特徴を持ち、また、型式も少しずつ違うという事がわかってきた。これは、橋本久和氏による各地域での積極的な瓦器碗編年の研究によって⁽⁵⁾、各地の編年研究が行われている。

一方、瓦器碗の製作技法についての研究は、その窯体が遺構として検出されることがなく研究も遅れていた。

このような中であって田中琢氏は、瓦器についての定義付けを行い、その中で、器面のへらみがき、全面の炭素吸着、高温度焼成による胎土の硬質灰白色化などを上げている。さらに、製作技法についても言及され、土師器と同じような左手手法の左まわりのまき上げ技法で、右まわりのよこなで成形をしているとされている⁽⁶⁾。

その後、川越俊一氏と井上和人氏によって、実験的な方法による製作技法の解明が行われた。川越・井上両氏の共同研究では、内型成形技法を取り入れて、型から外す時には吹き込み技法によるとし、統一規格と大量生産が可能になったとされている⁽⁷⁾。

これに対して、橋本氏は、和泉で出土する終末期の瓦器碗の粗雑な作り方や粘土紐巻き上げ痕跡が見られるとして、地域毎あるいは時間的な問題として内型成形ばかりではないとされている⁽⁸⁾。

こうした一連の研究は、碗を中心に、編年・分布論・製作技法等を研究したものばかりであった。しかし一方では、稲垣氏がすでに指摘している様に、碗や皿以外の鍋や羽釜、鉢などの大型製品が存在しているのである。

こうした大型製品は、瓦器研究の中では特に触れられることもなく、報告書等で瓦器として、あるいは瓦質土器という別称で、帰属年代をあてはめられる程度であった。しかし、煮沸形態の研究を進めた菅原正明氏は、中世の土釜に着目し、幾内における土釜の製作技法や「型」の分類を行い、さらに製作工人集団にまで言及された。この中で、瓦器窯工人集団について瓦器碗製作者集団とは別の工人集団であると考えられている⁽⁹⁾。

以上の様に瓦器研究史を見てきたわけだが、これらはすべて瓦器として認められているものばかりである。これは橋本氏が、羽釜や鉢などの厚手の製品を碗と区別して称することは、あまり意味がないとしたことによると考えられる⁽¹⁰⁾。

しかし、大型製品の中には、へらみがきを行わないものなどがあつたり、また、菅原氏が言うように、工人集団などは瓦器碗工人集団とは違い、分布圏内なども瓦器碗と違っている。さらに、製作技法なども瓦器碗工人よりも瓦工人集団に類似するとされている⁽¹¹⁾。特に16世紀以降になると、特殊な製品、例えば燭台や香炉といったものまで作られるようになっていく。報告書等の記載でも、筆者の知る範囲では「瓦質土器」として大型製品を報告しているものが多いと考える。

以上のことから「瓦質土器」という名称もかなりの範囲で認知されており、また碗や皿といった雑器とは違った製作集団の存在も考えられるため大型製品については「瓦質土器」と呼称する方が良いのではないかと考える。

3. 近江における瓦質土器の展開

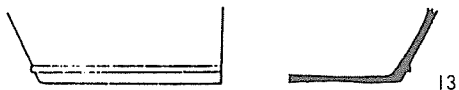
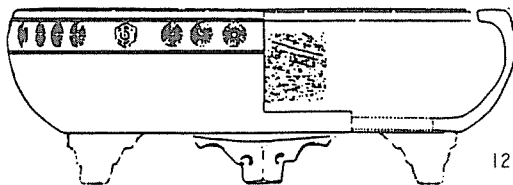
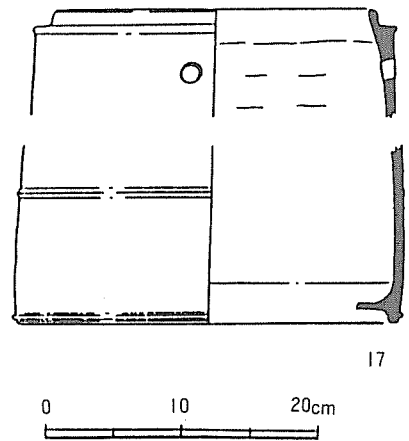
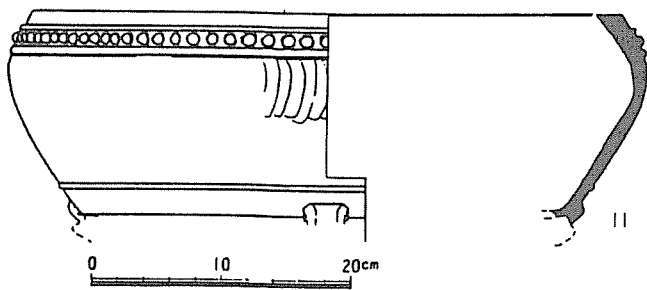
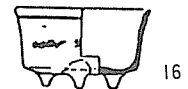
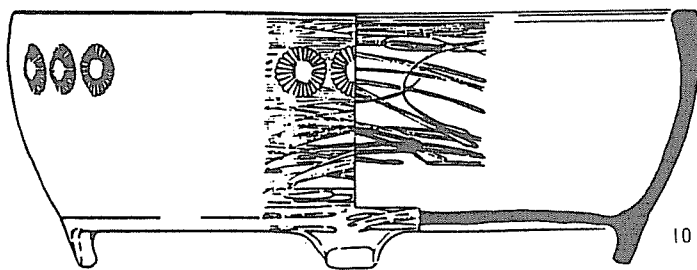
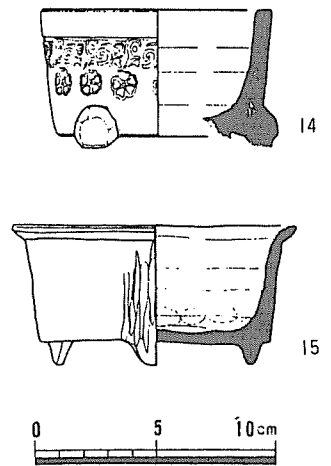
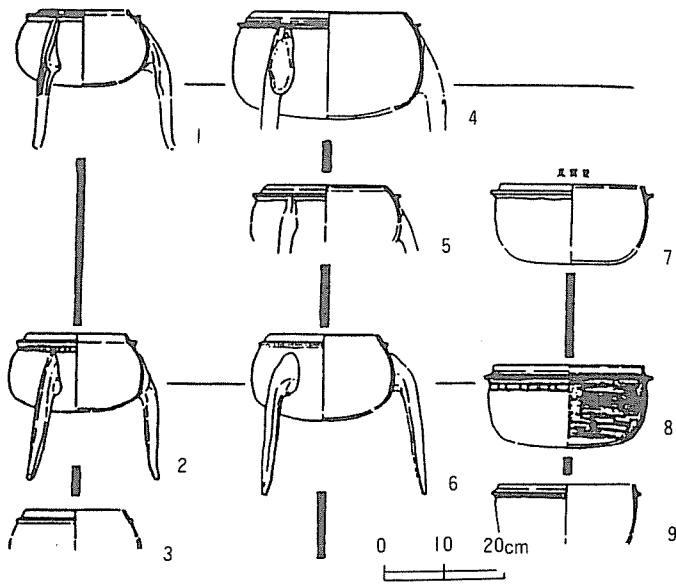
近江における瓦質土器の出土量は、近畿の他府県と比較しても非常に少ない。これは、奈良には中世奈良町、京都には平安京、といった比較的中世以後もその盛力を保ち、さらに中世寺社の権力が強かった地域とそうでない地域との差であるかもしれないが、それ以上に、近江の場合は中世以後の集落跡が現在の集落と重なっている場合が多く、発掘調査を行う機会が少なかったために、資料もまた少ないと考えられる状況である。

そこで、ここでは、近江出土の瓦質土器を時代順に追って見てみたいと思う。

1) 12世紀後半から13世紀

近江において、最初に瓦質土器が、出土する時期は、12世紀末から13世紀にかけてである。これは、「はじめに」でも述べたようにすでに、野洲町街道遺跡で12世紀後半に位置づけられる黒色土器と瓦質の三足土釜が共伴して出土していることが指摘されており、さらに、13世紀前半に位置づけられる黒色土器と、瓦質の羽釜が、共伴して出土している⁽¹²⁾。

これらの瓦質土釜を森は、山城地方で出土する瓦質土釜と形態的類似性を認める一方で、器壁



- 1~9 「滋賀県における古代末・中世土器」(『中近世の基礎研究III』)より
 10~11 「守山市杉江遺跡出土の中世土器について」(『滋賀文化財だより』)より
 12 「太宰府史跡」(第51次調査)より
 13 「柿木原遺跡」(『ほ場整備Ⅻ-2』)
 14~15 「吉地大寺第5次調査」(『中主町文化財調査概報』)
 16~17 「妙楽寺遺跡II」より

瓦質土器参考資料

厚が厚手であること、そして、やや軟質な焼き方であるなどから、在地性である可能性が強いという見解を述べられている⁽¹³⁾。やはり、この時期にあたる新旭町正伝寺南遺跡でも、瓦質羽釜が多数出土しており、共伴遺物より、12世紀末から13世紀初頭にかけての時期であるとされているものがある。また、さらに、正伝寺南遺跡では、瓦質羽釜が出土した土器溜りより、自在釣が出土しており、遺構にも囲炉裏の存在をうかがわせるものがあるとされ、12世紀以後の煮沸形態が多様化していることを示している⁽¹⁴⁾。

2) 13世紀代

13世紀のまとまった資料はほとんど知られていない。ただし、野洲町常楽寺遺跡では鍋が出土しており⁽¹⁵⁾、このころより出現すると考えられる。鍋は量的には少ないが、これ以後も出土していることから、形態として続いていくものであろう。

3) 14世紀代

14世紀に入ると、瓦質土器の形態がそれまでの煮沸形態だけであったものが羽釜や、三足土釜とは違った方向に進む時期であり、いろいろな形態が出現してくる。

その第一が、火舎として用いられた鉢型のものであろう。この鉢型の瓦質土器は、筆者の管見した範囲では、東は鎌倉から、南は福岡・太宰府遺跡や佐賀県にまで広がって出土している。当時流行していたと考えられる平面形が八稜を為す火舎も鎌倉や、太宰府遺跡で見られた。

近江では、この八稜をなす火舎の出土が、延暦寺からの出土しかなく⁽¹⁶⁾、この資料も、14世紀中頃にあたるため、その変遷を知ることはできないが、円型のものについては、各地より出土している。円型のものとして知られるのは、守山市杉江遺跡⁽¹⁷⁾、近江八幡市柿木原遺跡⁽¹⁸⁾などである。この円型のものの中には、脚付きのものとそうでないものがあり、前者は、八日市市後藤館遺跡⁽¹⁹⁾のものもあげられる。近江八幡市柿木原遺跡のものは、脚なしのものである。また、こうした火鉢の他に、香炉として使用できるものが出現している。これには、彦根市妙楽寺遺跡出土のもの⁽²⁰⁾などがあげられる。

その他の形態としては、鍋があげられる。瓦質土器の鍋は、羽釜からの煮沸形態としての変化の中で取り上げられるべきものであり、森が指摘しているように、在地性の強いものであると考えられるが、筆者の管見した範囲では、延暦寺法華総持院出土⁽²¹⁾のものが、古い感じを受ける資料である。しかし、近年発掘された大津市坂本遺跡⁽²²⁾では、多量の鍋が遺構面とともに前後関係を明らかにして、出土している。これは、羽釜についても同じことで、多量に出土している。

4) 15世紀代

15世紀になると、羽釜・鍋・火鉢・香炉などが形態として続いている。さらにまして、風炉や茶釜といったものも、大津市坂本遺跡では見られる。風炉・茶釜などは、茶道具としての使用が考えられ、興味深いものがあるが、量的には非常に少ない。しかし、中国地方の岡山県岡山市にある沖ノ店遺跡では、多量に出土し、その窯体ではないかとされる遺構も検出されている。

このころより、火鉢として使用されている鉢が、従来の平面円型から、口縁部が内側にわん曲してくるものが目立つ様になる。この口縁部の内わん化が、果たして15世紀からそうなるのかは、定かでないが、広島県福山市草戸千軒町遺跡出土資料の草戸25次発掘調査出土のもの⁽²³⁾や、太宰

府遺跡(51)のもの⁽²⁴⁾などは、概ね、15世紀ごろより、この口縁内わん化が進むように思われる。近江では、坂本遺跡などに資料が見られる程度である。しかし、この火舎にしても、坂本遺跡では数点ではあるが、平面形が角型の火舎があり、火舎としての形態が様々なものになってくる時期でもある。

5) 16世紀代

16世紀は瓦質土器が多様化する時期であるが、煮沸形態としてき鍋・釜は従来通りのものである。器形的な変化が見られるのは火舎である。先ず、平面円形であった火舎としての火鉢が、円筒形をしたもの、いわゆるバケツ形の火舎が出現する。近江では、彦根市妙楽寺遺跡で、この形態のものが出土している。さらにこのバケツ形のもの、ほぼ同じくらいの時期で、大型の壺形の火舎も出現する。これは近江ではまだ完形品がないので、はっきりとした事は判明していない。

6) 17世紀代

17世紀以降の瓦質土器については、ほとんど知られていないが、坂本遺跡ではまとまって、鍋・釜が出土している。これは、17世紀以降の遺跡の発掘例が少ないためであるだけで、瓦質土器がないというわけではない。今後の資料増加に期待したい。

4. ま と め

以上のように近江における瓦質土器が各時期においてどのようなになっているかについて、その概略を述べた。しかしながら、資料がたいへん少ないために、いままでに筆者が見たものなども多少ながら付けくわえた。

このようにして少ない資料ではあるが、瓦質土器の展開を見ていくと、二つの特徴を上げることができるであろう。

一つは、瓦質土器の初源期である12世紀から13世紀にかけて出現する土釜である。これは、菅原氏や森氏がすでに指摘しているように在地性の強いものであり、かつ日常生活用具として不可欠なものである。近江においては、現在のところ三足土釜が最初に出現し、そののち土釜が出現するようであるが、菅原氏によれば、12世紀から13世紀にかけての時期は、煮沸形態にとっての画期となる時期とされており⁽²⁵⁾、その時期に足付きの固定することなく火にかけられるものがまず有り、そののちに足なしで、カマドを必要とする形態が出現するというのは、たいへん興味深い事であり、中世初期における煮沸形態が多様化している側面を見る思いがしてならない。また、正伝寺南遺跡では、土釜と共伴して自在釣が出土している。自在釣の存在は囲炉裏が存在した事を裏付けることになると考えるが、正伝寺南遺跡では囲炉裏と考えられる遺構は無かったという事である⁽²⁶⁾。囲炉裏として考えられる遺構は近江にはまだ無いが、鎌倉では13世紀から14世紀代に属する囲炉裏の遺構が検出されており⁽²⁷⁾、中世の煮沸形態を考える上で多くの示唆を与えている。

もう一つの特徴は、最初にあげた特徴とは全く相反するもので、日常性に対しての特殊性ということである。

日常性として上げた土釜は12世紀から13世紀にかけて出現し、17世紀以降も続くが、特殊性と

して上げる火舎=火鉢は14世紀代にその出現を見て17世紀代で終焉する。

火舎の使用例は絵巻物で見ることができる。「信貴山縁起」では、木製の（と思われる）火櫃と呼ばれる容器の中に火舎を入れて使用するものや⁽²⁸⁾、「春日権現記絵」に見られるように、そのまま使用するもの⁽²⁹⁾の二通りがある。また、火鉢の出現とほぼ同じころから出現する香炉もまた特殊な遺物であろう。この2器種は特殊性のあるものの中では全国的に見ても出土例は多い。この他には、燭台や茶釜なども上げられる。

これらの製品は、日常雑器として椀や皿のように誰もが使用できたものではなく、ごく限られた階層、すなわち土間ではなく、板間などに居住できた階層が使用したのであろう。特に火舎は、これ本来の使用目的からすれば、暖を取るためであり、囲炉裏とは違って移動する事のできるものである。逆に言えば、移動しなければならぬほどの居住空間を持つものしか必要のないものである。この特殊性から考えれば、火舎はそれほどたくさん消費するわけでもないので生産量も少ないのではないであろうか。そして、このように少ない生産量で済むものであるにもかかわらず、『大乘院寺社雑事記』に見られる火鉢座という座が作られるのはどうしてなのであろうか。この問題に確答する事はできないが、奈良産の火鉢を京都で売買している事などから、京都以外の他の地域でも売買し、近畿一円で取引きされていたのではないかと考えられる。筆者の見た限りでは、広島県草戸千軒町遺跡出土の火舎の中で畿内でよく見る八稜の火舎があることなどから瀬戸内海沿岸部にも波及していたのかもしれないが、これについては別稿を用意しここで述べる事にする。

以上のように二つの特徴を上げて見た。これらは、その生産量からしても当然別々の工人集団がいて、それぞれ専門工人集団として製作していたと考えられる。土釜を製作していた集団については菅原氏が言及されているが、火舎など特殊な遺物を製作していた集団に対しては、いまのところ上述した火鉢座の専門集団しかわかっていないし、またその流通などの実態も解明されていない。今後は、近江における土釜工人集団の分布を明らかにするとともに、特殊な製品を製作していた集団に対しても実態を明らかにしてみたいと考える次第である。

最後に、近江における瓦質土器の資料が少ないために、統計的な考察ができなかった事、また、未発表資料も多く提示できなかつた事をおわびしたい。

注

- (1) 森 隆「139. 野洲町北桜南遺跡出土師釜について」（『滋賀文化財だより』No.106滋賀県文化財保護協会 1985年）
- (2) 森 隆「滋賀県における古代末・中世土器」（『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986年）
- (3) 稲垣晋也「法隆寺出土の瓦器椀」（『大和文化研究』6巻4号 1961年）
- (4) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」（『古代学研究』54 1969年）
- (5) 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第13冊 1980年）
- (6) 田中 琢「古代・中世窯業の地域的特色(4)畿内」（『日本の考古学IV 歴史時代上』1967年）

- (7) 川越俊一・井上和人「瓦器椀製作技術の復原」(『考古学雑誌』第67巻2号 1981年)
- (8) 橋本久和「中世土器の製作技法ノート(1)」(『中近世土器の基礎研究III』日本中世土器研究会 1987年)
- (9) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983年)
- (10) 前掲注(5)
- (11) 前掲注(9)
- (12) 前掲注(2)
- (13) 同上
- (14) 清水尚氏より御教示いただいた。
- (15) 前掲注(2)
- (16) 兼康保明氏より御教示いただいた。
- (17) 小竹森直子「145. 守山市杉江遺跡出土の中世土器について」(『滋賀文化財だより』No.113滋賀県文化財保護協会 1987年)
- (18) 「I. 近江八幡市柿木原遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XII-2 滋賀県教育委員会 1986年)
- (19) 「後藤館遺跡」(『内掘遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』八日市文化財調査報告(2) 八日市市教育委員会 1983年)
- (20) 『妙楽寺遺跡II』(滋賀県教育委員会 1985年)
- (21) 兼康保明「66大津市延暦寺法華総持院発掘調査抄報」(『滋賀文化財だより』No.36滋賀県文化財保護協会 1980年)
- (22) 栗本政志氏より御教示を受け実見した。
- (23) 木戸雅寿氏より御教示を受け実見した。なお、草戸千軒町遺跡では多数の瓦質土器が出土している。
- (24) 「第38次調査」(『太宰府史跡』昭和51年度発掘調査概報 九州歴史資料館普及会 1977年)
- (25) 前掲注(9)
- (26) 前掲注(14)
- (27) 馬淵和雄「中世都市鎌倉の煮炊様態」(『青山考古』第5号、青山考古学会 1987年)
- (28) 渋沢敬三『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻、118図(平凡社 1984年)
- (29) 第4巻 538図

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年でありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241